

〈翻訳〉

ラフ族の創世神話「牡帕密帕的故事」

柏木 豊美 (訳)

本稿は、雲南拉祜族民間文学集成編集委員会 (1988) 『拉祜族民間文学集成』 (中国民間文芸出版社 90 ~ 100) 所収のラフ族創世神話「牡帕密帕⁽¹⁾的故事」の全訳である。「牡帕密帕的故事」は、中華人民共和国成立後の1950年から始まった少数民族社会歴史調査⁽²⁾後に収集された、口頭伝承によるラフ族の創世神話を整理し、漢語訳されたものである。本翻訳は、ラフ族の創世神話の最初の日本語全訳である。

I. 解説

以下では、拙著 (2016) 「ラフ族の創世神話に関する一考察」に基づいて、1. 西南少数民族とラフ族の創世神話に関する先行研究と、2. ラフ族の創世神話に関する一考察に分けて述べる。

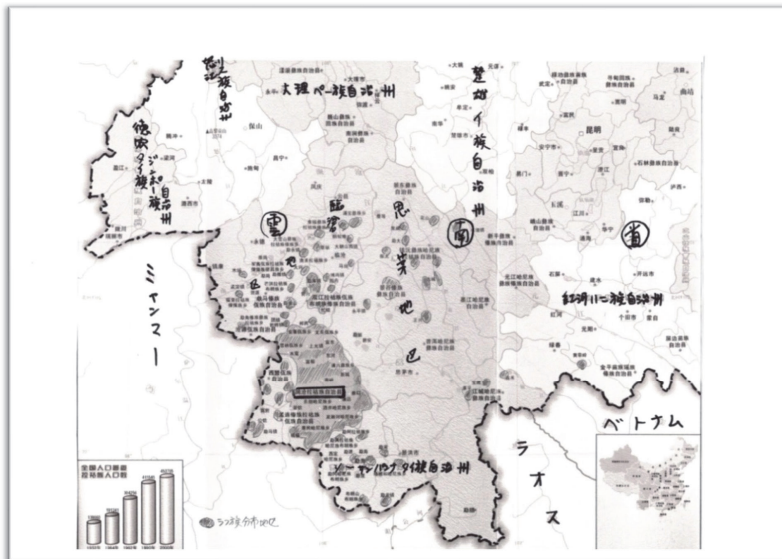
ラフ族概要

ラフ族は、漢チベット語族チベット・ビルマ語群イ語系のラフ語を有し、古代羌 (チャン族) を祖先にもつという伝承を持ち、青海・四川を経て雲南・東南アジアへ移動を続けた跨境民族である。チベット高原を水源にし

(1) ムバミパの別称は「牡笛密笛 (ムディミディ)」と言い、ラフ語で「牡 (ム) は天、「密 (ミ)」は地、「帕 (パ) と笛 (ディ)」は開拓、創造を意味する。牡帕密帕 (ムバミパ) は天地創造を意味する [劉2010: 3]。

(2) 1950年に始めて中央訪問団が西南地区に入り、少数民族社会の歴史状況・習俗・文化を調査した結果、雲南省の自己申告の少数民族は260余りあった。その後、民族の識別を行い、ラフ族を含め22の少数民族が確認された [雲南省編集組1981: 15]。

雲南省におけるラフ族分布図



楊 (2011)『中国拉祜族』寧夏人民出版社附録の地図に筆者加筆。

※図左下の人口のグラフは 2000 年のもの。

て雲南省を貫き流れ、東南アジアに入るとメコン河と呼ばれる大河、瀾滄江の西側に住む拉祜納 (ラフナ) と東側に住む拉祜西 (ラフシ) という支系 (集団) に分かれ、言語や服装に差異がある。1953 年の民族識別でラフ族に統一された。その後 1985 年に、それまで苦聰 (クーツォン) 人と呼ばれていた人々もラフ族と識別された〔田畑久夫他 2001 : 149 ~ 150、237〕〔楊 2011 : 5〕。

中国国内のラフ族の総人口は、約 47 万 5 千人 (2010 年人口調査)。そのうちの約 28 万人が雲南省西南部の瀾滄・孟連・西盟・勐海・臨滄・景谷等の諸県の山間部に集中しているが、西双版纳タイ族自治州・红河ハニ族イ族自治州・玉溪市にも少数が住む。居住地は、佤 (ワ) 族・傣 (タイ) 族・哈尼 (ハニ) 族・布朗 (プーラン) 族・彝 (イ) 族・漢族等と入り組んでいるが、一つの部落に他民族が混在することはない〔田畑 2001 : 149、150〕〔馬 2013 : 2〕。

また、片岡〔2010：273〕によると、東南アジアのラフ族は約14万人が雲南に近いミャンマー東北部に住み、約4万人がタイ国北部、約1万5千人がラオス及びベトナムに住む。清末の中国における中央権力介入⁽³⁾が強化されたことに伴い、ミャンマー、ラオスに渡り、20世紀以降にその一部がタイ北部に移住したとみられる。

ラフ族は海拔1500 m以上の山地に住むため、小さな集落が交通の不便な山間に点在する形になり、物質面の生活条件や生産力の発展状況が集落ごとに異なる。かつては、焼き畑耕作と狩猟採集を主な生業としてきたが、近年は政策により、松脂採取・茶の栽培・養蜂が盛んになり、製糖工場や製茶工場の賃金労働に就く者や都市部に出稼ぎに行く者も多くなった〔楊2011：23～28〕。

〔楊2011：213～224〕によると、宗教信仰は、民間で形成された祖先崇拜を中心として自然崇拜・トーテム崇拜・靈魂崇拜が複雑に入り混じり一体となっており、どの家にも祭壇があり、各集落には宗教儀式を行う堂がある。宗教儀式は、特殊な技能と素質を持つ“磨八(巴)”(モバ)が中心となり、様々な祭祀・呪術・占い・禁忌の信仰活動がよく行われる。祝祭日は、春節(旧正月)・火把節(松明祭り)・新米節・葫蘆節等がある。

また、18世紀初めに、雲南大理国を経て大乘仏教がもたらされ、20世紀初めには、アメリカの宣教師がキリスト教を伝播したが、これらの宗教もラフ族は受け入れている。

1. 西南少数民族とラフ族の創世神話に関する先行研究

(1) 日本における研究

西南少数民族の神話研究は、1980年代から伊藤清司、君島久子、村松一弥等が行っていたが、ラフ族創世神話の単独の研究は行われておらず、西南少数民族の創世神話の一例として挙げられている。また、日本における神話研究は主として、神話の構造を分析し近隣民族の神話との比較が中心である。

さらに谷野〔1983：7～50〕は、西南少数民族の創世神話のモチーフを

(3) 少数民族の首長たる土司・土官を廃止し、朝廷から官吏を派遣して少数民族を統治する制度(改土帰流)が徐々に進化した〔馬2013：208〕。

語群別に分類し調査した。その順序は、雲南省中央部に多く分布するチベットビルマ語群の民族（トールン族・ヌー族・リス族・ナシ族・プミ族・ペー族・楚雄イ族・路南イ族・ハニ族・ジンポー族・アチャン族・ラフ族）を北から南へ、次は雲南省西南部のモンクメール系の民族（徳宏タイ族・耿馬タイ族・シーサンパンナタイ族・ワ族・パラウン族・プーラン族）、最後は雲南省東南部のチワン族やミャオ族を調査した結果、各族に共通するモチーフが多くあり、それらの分布に着目した。

その結果、近接した民族ではあるが、文化系統の違う民族に同じモチーフがあるのは、チベットビルマ語群イ語系の民族がチベット高原から雲南省へ南下してきたという民族の移動が創世神話の中に見て取れると分析している。そして、各民族の創世神話を構成するモチーフを分類すると以下の4つに分けられるとしており、その具体的類型の中でラフ族の創世神話のモチーフを分析している。

①死体化生

- a. 動物や人間の死体から宇宙の事物が発生した（死体化生）。
- b. 生きた動物や人間の身体の各部位が、宇宙の事物に化生した（生体化成）。
- c. 創造神が身体の垢を擦りだし、それを捏ねて万物を創造する。

②天を支える柱（天柱）

動物の四肢あるいは樹木、金属などの柱が天を支える。

③魚が大地を支える（魚の大地）

- a. 巨大な魚、亀などの水族、あるいはその他の動物が大地を支えている。
- b. 原初、陸地はなく天と海のみがあった（原初大海）。

④天地分離

- a. むかし、天と地は未分離であったが、のちに創造神がそれを切り離れた。
- b. むかし、天と地はすぐ近くにあり、天に続くはしご（天梯）によって、自由に行きが出来た。
- c. 巨人あるいは人間が天と地を押し広げた。
- d. 世界の中心に天を貫く樹（世界樹）がある。

この中で、谷野は、ムパミパの創世モチーフは、①死体化生のc、創造神厄莎(ウシャ)⁽⁴⁾が身体の垢を擦りだしそれをこねて万物を創造するタイプと、②天を支える柱(天柱)③魚が大地を支える(魚の大地)のaが結合したタイプであると分析している。

しかし、故事はウシャは垢を擦りだし天の柱、四匹の魚⁽⁵⁾を創った後、同様に垢を擦りだし阿朵(アド)、阿嘎(アガ)、扎⁽⁶⁾倮(ザルオ)、娜⁽⁷⁾倮⁽⁸⁾(ナルオ)、扎耶(ザイエ)、娜耶(ナイエ)の六神を創り出し、アドに天の網、アガに地の網、ザルオに天、ナルオに地を造らせたが、天地がうまく合わず裂け始めたのでウシャは自ら創った鳥たちに繕わせた後、ザイエに天がちゃんと直ったか、ナイエに地がちゃんと直ったか見に行かせたとある。よって、これは最高神ウシャが、自身の下位に天地創造の手助けをする神を創り、これら六神の力を借りて天地創造を完成させた型があると思われる。上記の谷野の分析したモチーフに六神創造というモチーフを加えるというのが自説である。

一方、タイのラフ族の研究をしている片岡は、2008年にミャンマーやタイの山地で読まれているラフ族の神話、ミャンマーのラフ族牧師チャレ著『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』を編訳している。これは、ミャンマーのラフ族の牧師がキリスト教徒のラフ族に語りかける形式の創世神話で、一神教であるキリスト教に合わせて話が語られているので、ウシャー人が創世したとしており、各節に該当するキリスト教の福音書がある。また、片岡〔2016：242～246〕によると、近年の中国では葫蘆文化と言う形でラフ族の祖先が葫蘆(ひょうたん)から生まれたという神話を利用し、民族を動員して共産党を賛美するための道具としていると述べている。

(2)中国における研究

中国においては、1950年代後半から少数民族の神話や伝説の収集整

(4) 厄(ウ)は男の神で厄雅(ウヤ)、莎(シャ)は女の神で莎雅(シャヤ)と言い、合わせて天神厄莎と呼ぶ〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48〕。

(5) 別の版本「厄雅莎雅造天地」では4匹の魚ではなく4匹の龍となっている〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48〕。

(6) ラフ語の、男性の名前につける冠詞〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48〕。

(7) ラフ語の、女性の名前につける冠詞〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48〕。

(8) ラフ語の、増える、添える、補うという意味〔中国民間文学集成全国委員会2003：48〕。

理⁽⁹⁾が始まり、文化大革命収束後の1976年以降から、少数民族ごと及び省ごとの文学作品集として出版されている。

李子賢はこのころから西南少数民族の神話を研究し、伊藤清司、君島久子等と西南少数民族の穀物起源神話を発表している中にラフ族の穀物起源神話の分析をしているが、創世神話については分析していない。

また、2000年以降の普洱学院、思茅師範高等専科学校、楚雄師範学院、昆明学院の各学報に神話に関する研究発表があるが、それらは葫芦神話の中の一つとしての分析、創世神ウシャと宗教の関係性の研究及び、民族の文化を伝承するものとしての研究である。

①羅承松「思茅少数民族的葫芦神話与其文化内涵」思茅師範高等専科学校学報2001年第17巻第2期—葫芦から人が出てくるという神話はインドを経て四川・雲南に伝わり、洪水神話と結合し人類再生の神話となったが、ある民族は独立した葫芦から人が生まれたという形を残している。ある民族とはラフ族であると思われる。

②張勁夫、温美珍「拉祜族神靈信仰与占ト習俗初探」思茅師範高等専科学校学報2008年第24巻第4期—ウシャは万物の創造主で、ラフ族にとって極めて感情に訴える対象となっているし、ラフ族は“対”と言う観念でウシャの二面性、厄雅（男の神）莎雅（女の神）と解釈しており、両方を合わせて厄莎（ウシャ）と呼んでいる。また、神と人と言う意味もあり、ウシャは人類の祖先である。

近代に仏教やキリスト教がラフ族地区に伝播されても、ウシャは釈迦牟尼やイエスキリストに第一位を取って変わられていない。これがラフ族伝統信仰の特徴である。儀式の時、宗教者はウシャの超自然的能力を借りて妖怪や亡霊を駆逐する。

③楊雲燕「拉祜族創世史詩《牡帕密帕》的思惟構造解讀」楚雄師範学院学報2012年第27巻第7期—創世史詩は原始の概念、即ち自然万物と人類は同じ心理と活動組織から成っているということが大きな特色で、このような心理活動及び思惟意識の発生と原始社会の認識水準は相応するとしている。

④開万「《牡帕密帕》的叙事主題与拉祜族文化的創新性發展」昆明学院

(9) 当時の政治状況に合わせ、社会主義の精神に反するものは除かれた。

学報2019年第41巻第1期—これは叙事詩についての研究であるが、儀式等で輪唱されるので年配者から青年達に生活の知識を伝えると共に感化をするものであるとしている。また、神話と宗教は共通の特性があると述べている。

次に、聞一多〔2002:105～108〕によると、人類が繁栄する故事の中で、葫芦から初めての人類が現れることについて、中国西南部の少数民族ないしその地域外や、東は台湾、西はベトナム、インド中部に伝わる、一組の兄妹婚型故事の洪水で生き残った兄妹が新たに人類を造る形は以下の形式に分けられるとしている。

1. 男女が葫芦の中から出てくる。
2. 男女が瓜の花の中に座っていて、実が結ぶと二人は瓜の中に包まれる。
3. 人の種を造って鼓の中に入れておく。
4. 瓜の種が男に変わり、瓢（種の周りの果肉）が女に変わる。
5. 瓜を薄切りにすると瓜の切片が人に変わる。
6. 瓜の種を播くと、種が人に変わる。

上記の1がラフ族にみられる形式であるが、洪水は起きておらず、ウシャが育てた葫芦の蔓をキョンに伐られてしまい転がり続け、最終的に海に浮かんでいるのを見つけ持ち帰り、物干し台で干していたら中から男女の声がしたので、雀が啄み、最後に鼠が咬んで穴をあけ、中から一組の男女が出てきた。

上述から解るように、ラフ族の創世神話は、日本及び中国においても単独で研究されたことはあまりない。しかし、日本においては、神話研究の一環として、西南少数民族の創世神話の構成要素や構造を重視しているのに対して、中国では神話と宗教を関連付け、或いは民族の歴史を語る文学作品として扱われており、自民族研究の一環としての立場が明確に打ち出されている。

2. ラフ族の創世神話に関する一考察

雲南省編集組〔1981:44、1982:104〕によると、ラフ族は20世紀になるまで文字を持たず、伝えたい事柄は、木に印を刻む・縄を結ぶ・実物を持つという方法で伝えてきたが、神話は宗教の指導者であるモバや長老

が口頭伝承により伝えてきた。

20世紀中頃になるとラフ文字が造られた。その経緯は、1952年から中国科学院言語研究所の調査団が言語調査を始め、1954年に無文字民族の文字創立問題を報告し、1956年からラフ族の幹部と共にラフ族が居住する雲南省各県を調査した結果、瀾滄県糯福地区（ミャンマーの国境に近く、ミャンマーとの往来があり交易が行われている）のラフナ方言を標準としたラフ文字が造られた。その後、1957年に民族出版社を創立し、口頭伝承による文化と歴史を民族の文字で記録し始めたが、1960年代には文化大革命等があり、ラフ文字の普及と使用が中断した。しかし、文化大革命が収束後の1976年から使用が再開された。

上述のような言語関連の変革の後、1979年から2009年まで約10年おきに出版された創世神話は、いずれも1950～60年代に瀾滄県の各地区で収集されたものであり、構成要素はほぼ同じであるが、以下のように出版年が離れているものに多少の違いが見られるのは、収集時の各地区のインフォーマントの語りの違いや収集整理段階における違いであると思われる。

①1979年昆明師範学院中文系1957級部分学生収集・劉輝豪整理『牡帕密帕史詩⁽¹⁰⁾』雲南人民出版社、1988年雲南拉祜族民間文学集成編集委員会「牡帕密帕史詩」『拉祜族民間文学集成』中国民間文藝出版社1～89、1995年本書編集委員会編「牡帕密帕的故事」『中華民族故事体系』683～694上海文芸出版社

②2009年中国少数民族社会歴史調査資料叢書修訂編集委員会編「瀾滄県拉祜族社会文化調査一、族称・族源・創世神話」『雲南少数民族社会歴史調査資料集4』48～49民族出版社

上記の①、②の文献の発表には30年の隔たりがあり、ラフ族の創世神話の三部に分かれる部分ごとに多少の違いがあるので比較すると以下のようである。天地創造は、第一節の造天造地のみである。第二節の造物造人は、ウシャが動物、花木を造ったあと人類の始祖となるザディとナディを造り、第三節以降は、生きていくために必要な物や作業を得る過程を述べ

(10) 口承創世史詩。宗教儀式、祭日のイベント等で披露される。2006年に雲南省人民政府により第1回省級無形文化遺産リストに収録された〔劉2010：3〕。

ている。

A. 原初の状態

- ①蜘蛛の巣のよう。がらんとしている。分離者は天神ウシャとウシャが造ったアド、アガ、ザルオ、ナルオ。分離の方法は、ウシャが垢を擦り造った4本の柱と4匹の魚。
- ②天地がくっついている。分離者は蜘蛛、ザブ、ディブ。

B. 日月星一年の創造者と材料

- ①ウシャ。ウシャの目と髪。金。銀。雄鶏。蛙。
- ②ザルオ、犁、蛙。

C. 万物の創造者と最初の人間

- ①ウシャ。ウシャが持っている箱の中にあつた葫芦の中から最初の人
の男女が出てきた。葫芦の種は箱や灰の中にあつた。
- ②ウシャ。ウシャが身体の垢を擦りだし大きな葫芦を造る。その中の
種が人に変化する。ウシャが息子ザヌザベを生む。

D. 人類の繁栄

- ①兄妹婚。多くの子供を動物に育てさせる。
- ②兄妹婚。

E. 生活するための物を得る

- ①火を得る一落雷による山火事。
狩り一民族が分かれる。棲む所が分かれる。
分配一蟻の行列を見習う。
家を作る一鳥や鼠の巣を真似る。
農具を造る一鉈脈を見つける。鍛冶屋を連れてくる。ジャコウジカ
の骨から農具を造る。
穀物の種一鳥が運んできた。
棉の種一北京から持ってくる。機織り、染色、衣服を作る。
鶉が舞い踊る一祭り、正月を決める。
- ②火を得る一山火事。
農具を造る一鉈脈を見つける。鉄。
穀物の種一ウシャが粟の種をもたらす。
棉の種一野生の棉。芭蕉の葉で衣服を作る。

民族一兄妹の子が違う言葉を話し始め、各民族ができた。

創世神話は、民族が自然の驚異と闘いつつ独自の文化を創ってきた歴史を物語っており、万物の起源は本当の起源のように述べられているが本当の起源ではなく、この世に科学がない時代の人間には理解できない気象現象や万物の発生に対する恐怖や驚きを語ったものであると思われる。そこからすべての物に魂があるとするアニミズムが生まれた。さらに、万物を創造したとされる最高神ウシャ及び、ウシャにより創られたアド、アガ、ザルオ、ナルオ、ザイエ、ナイエの六神はウシャの天地創造を助けたとして多神教が生まれるもとなったと思われる。

また、ラフ族は、古代より様々な民族と文化の交流をしながら、その影響を受けつつ青海省・四川省から雲南省へ、更にミャンマー、タイ北部に移動し定住した。また、清代以降は漢族文化の流入や、現代においては出稼ぎや婚姻による遠隔地への移動などの影響も大きく受けている。よって、ラフ族は自民族の文化を伝えるとされる創世神話を経典として民族の団結を強化しようとしていると思われる。

故に、1950年代に民間文学の収集が始まった時点で、創世神話にも交流のあった民族の影響があり、ラフ族を含む西南少数民族の間には類似する構成要素や構造を持つ創世神話がある。また、一つの民族に居住地や方言、多少の文化の違いの異なる集団があり、伝承されてきた創世神話も一民族に一つの形ということはないと思われる。

1992年、瀾滄拉祜族自治県人民政府はこの創世神話をもとに“阿朋阿龙尼”（葫芦节）を決め、毎年農歴10月15日、16日、17日に行なっており、民族の団結と伝統文化を広め経済の発展を促している。加えて、葫芦を民族のシンボルと定め、公共施設に葫芦を題材にした彫塑像を配置する、さらに観光業に関わる人々の民族衣装や晴れ着の装飾に葫芦文様を取り入れている。

Ⅱ. 創世神話「牡帕密帕的故事」

一、天と地を造る

遠い昔、天もなく、地もなく、太陽・月も星もなく、ただ混沌とした宇

宙だけがあった。多くの年月が過ぎ、ウシャは混沌とした宇宙の中に誕生した。

ウシャが生まれた時、糸のように細い髪の毛と足の毛があるだけだった。ウシャが一度身を翻すと成長し、足は長く伸び背が高くなった。ウシャは考え始めた。横になり考えたので、横になり過ぎて多くの寝床を壊してしまった。座って考えたので、腰掛に座り過ぎ多くを壊してしまった。立って考えたので、多くの靴を履きつぶしてしまった。ウシャは一生懸命考え、天と地を造る必要があると思った。

ウシャは手を揉み足を揉み、4本の大きな柱を造った。金、銀、銅、鉄の柱である。次に4匹の大きな魚を造った。金、銀、銅、鉄の魚である。柱は魚の背中に支えられ、更に4本の天の梁と4本の地の梁も支えられた。360万本の天の垂木が天の梁の上に置かれ、360万本の地の垂木が地の梁の上に置かれた。

ウシャは手を揉み足を揉み、アド・アガの一組とザルオ・ナルオの一組を造った。アドは天の網を編み、360万の網を編んだ。アガは地の網を編み、360万の網を編んだ。ザルオは、天を造り、ナルオは地を造った。天を造り地を造るのに長い年月がかかった。

天が出来、地が出来て、ウシャは天と地を合わせたら、天は小さく造られ、地は大きく造られたことに気が付いた。もともと、ザルオは自分の力は強いと思っていたので、のろのろと天を造り、ナルオは自分の力は弱いと思っていたので、きびきびと注意深く地を造った。だから、ザルオの天は小さく造られ、ナルオの地は大きく造られた。

ウシャは、やむなく天をピンと大きく張り、地を縮めて小さくした。天は、鍋の底のような形の天になり、地はでこぼこの平らでない地になった。天と地はぴったり合わさったが、ウシャは天はどれくらい高いか、地はどれくらい厚みがあるのか解らなかったので、2匹のセンザンコウに調べに行かせた。1匹は天に穴をあけ、1匹は地に潜り込んだ。センザンコウは戻って来てウシャに言った「天と地の厚みは同じだ」。だけど、天も裂けたし、地も裂け始めた。ウシャは手を揉み足を揉み一對のツバメを造り、天と地を繕いさせ、一對のスズメに地を踏みつけさせた。ツバメは裂けたところを繕い、スズメも裂けたところを踏みつけた。天地は長い時間を費やし直

された。天地はちゃんと繕われ、ちゃんと踏みつけられた。ウシヤは手を揉み足を揉み一組のザイエとナイエを造り、ザイエに天を見に行かせ、ナイエに地を見に行かせた。彼らは戻って来てウシヤに言った「天と地は同じように丸くなりました」。

天はうまく出来たし、地もうまく出来た。天と地があるようになったが、太陽と月がなく、時と星がない。ウシヤは360万斤の金を溶かして太陽を造りだし、360万斤の銀を溶かして月を造った。ウシヤは太陽娘を夜に歩かせ、月青年を昼間歩かせた。太陽娘は言った「夜、ヒョウに咬まれるのが怖い」。月青年は言った「昼間、トノサマガエルに咬まれるのが怖い」。ウシヤは、太陽と月をお互いに引っ張ばらせ歩かせた。太陽娘は言った「昼間、私は恥ずかしい」。ウシヤは太陽娘に1本の金の針を与えて言った「誰かがお前を見たら、この金の針で眼を突いてやれ」。太陽娘は喜んで金の針を受け取った。月青年は言った「トノサマガエルは夜も出てくるのが出来る」。ウシヤは月青年に1本の銀の針を与えた。銀の針は氷のようでもあり冷たい。トノサマガエルは来ようとしな。ウシヤは太陽と月に告げた「お前たちはちょっと出てきて、ちょっと休む、30日歩くと1ヶ月、12ヶ月で1年となる」。天があり、地があり、太陽も月もある。ウシヤが金や銀を砕いて天に撒いたら、空いっぱい星になった。

二、物を造り人を造る

天地がちゃんとできて、太陽、月、星もあるようになったが、大地のある場所は水が多く、ある場所は水がない。ウシヤは一對のアヒルを造り、湖の水を均等に分けて大地のいたるところに水があるようにするように言った。アヒルは長い年月をかけて水を分け、多くの大河を造った。しかし、水はまだ不均等で、主として谷を掘る作業がとても大変なことだ。ウシヤはやむなく一對のカニを造り、水路を掘る手伝いをさせた。カニはまた長い年月をかけて谷を掘り、やっとな水を分けるのを終わらせた。

大地のいたる所に水があるようになったが、地面はまだつるつるだった。ウシヤは手の泥足の泥を擦り落とし、様々な種に変化させ大地に撒いた。一回目は草の種を撒き、二回目は木の種を撒き、三回目は芭蕉と藤の種を

撒いた。種を撒き終わり、36日⁽¹¹⁾が過ぎると芽が出始めた。長い年月が経つと、草花は育ち竹や木は林になった。

ウシャは手の泥足の泥を擦り落とし、一對のハッカ⁽¹²⁾ンを造った。ハッカ⁽¹²⁾ンに種の成長を見に行かせた。ハッカ⁽¹²⁾ンは長い間ぐるぐる飛び回り、天の果て地の隅々まですべて見終わったので、戻って来てウシャに言った「草花は山の高いところで育っており、木々は山の斜面で成長している、竹は河辺で育ち、芭蕉は樹木の生い茂った谷間で育っているが花は咲かない。竹は枝も葉もない」。ウシャはザルオ、ナルオに作物の苗を育てに行かせた。ザルオとナルオは草むらで手指を広げて草を取った。ナルオは花の群れの中に行き、指で耳飾りにあらゆる花をつけた。ザルオは林の中に入り、両手を伸ばして枝を取った。ナルオは竹林の中に入り、指で筍の尖った葉を広げた。

ウシャは手の骨、足の骨を数え一年を四季に分けた。一つの季節は暖かく、芽の出る季節。一つの季節は暑く、成長する季節。一つの季節は涼しく、成熟する季節。一つの季節は寒く、休息の季節。これ以後、大地で花は咲き散り、果実は実を結び落ちる。ハッカ⁽¹²⁾ンは嬉しそうに林の中に飛んで行き巣を造った。

ザルオとナルオは四方を観察し、ウシャに報告した「茅の林は良く育っているが、ただ泡竹は細いし、茨竹は短い」。ウシャは聞いた後、話を続けた「茨竹は尾根の峠に移し、泡竹は山の樹木が茂った所に移す。泡竹は大きくなり、茨竹は丈が長くなる」。

花、草、林があるようになって、ウシャはまた手の泥足の泥を擦り落とし、様々な鳥や獣を造りだした。しかし、すべての鳥は飛ぶだけ、すべての獣は歩くだけ、黙っていて何も言わないし、声も出さない。ウシャは自ら一つの河を掘った。流れる水は酒のように香り、蜜のように甘い。すべての鳥が来て水を飲み、淑やかで美しい人を引き付ける歌を歌う。すべて

(11) ラフ族の日数の数え方で、干支の十干（甲、乙、丙等）と干支の十二支（子、丑、寅等）を組み合わせ一輪とする。一輪は12日なので、三輪は36日となる〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48〕。

(12) 白鷗。キジ目キジ科。オスは顔と足が赤、頭部と腹部は黒、背中から長い尾にかけて白く全長は70～125cm、メスは55～70cm。ミャンマー、中国南部、タイ、インドシナ半島にかけての高地に生息する〔ブリタニカ国際大百科事典電子版：2015〕。

の獣が水を飲みに来て自分たちの言葉で話すことができる。木の上のすべての鳥は騒がしく、山のキョン⁽¹³⁾は鳴くが、しかし人の声は聞こえない。

ウシャは大きな木の下に見張り小屋を作った。籠を開き一粒の葫芦の種を取り出し置いて草木の灰を被せた。91日が過ぎ、葫芦は芽を出した。さらに84日が過ぎ、葫芦はつるを伸ばし始め、つるは竿のように太い。葉はふると比べるとまだ大きくなる必要がある。さらに84日過ぎ、葫芦のつるは大きな木いっぱいに這い上がり、一つ白い花が咲き、一つの大きな葫芦ができた。さらに7ヶ月が過ぎ、葉が散り、つるも乾燥し、葫芦は成長して硬くなった。

ある日、キョンが大きな木の下に来たとき、ミミズクが枝の上で果物を食べていて、不注意から、キョンの頭の上に落してしまい、キョンはびっくりし葫芦のつるを切ってしまったので、葫芦は山を転がり落ちた。葫芦が見えなくなったので、ウシャはキョンに尋ねた。キョンは言った「ミミズクが食べていた果物が私の頭を打ち、驚かされ、葫芦のつるを切ってしまったのです」。ウシャはミミズクに尋ねた「どうしてキョンを打ったのだね」。ミミズクは答えなかった。ウシャはいきなり怒りだし、ミミズクの頭を打って平らにし、罰として昼間出て来てはいけないと言った。ウシャは急いで葫芦を探しに行った。ウシャは栗林に行き栗の木に尋ねた「葫芦を見なかったかね」。栗の木は答えた「見てないです」。ウシャは怒って言った「人が世に出るのを待って、お前を切って柱にする」。ウシャは茅の茂みに行き茅に尋ねた、茅は答えた「見てないです」。ウシャは怒って言った「人が世に出るのを待って刈り取って、家の屋根にする」。ウシャは芭蕉の林に行き芭蕉に尋ねた。芭蕉は答えた「見ました、しかし、私は手がないから持てないです」。ウシャは喜んで言った「お前は将来、たくさんの実を結び、子孫が多くなる」。ウシャは竹林に行き竹に尋ねた。竹は答えた「見てないです」。ウシャは怒って言った「人が世に出るのを待って、おまえを切って家を建て、編んで背負い籠にする」。ウシャは山レイシ⁽¹⁴⁾の林に行き尋ねた、山レイシの木は答えた「見ました」。ウシャは喜んで言っ

(13) 麝子。偶蹄目シカ科。体長90～140cm、体高40cm。中国南部、台湾の森林地帯に生息する〔ブリタニカ国際大百科事典電子版：2015〕。

(14) 鸡嗑果。常緑小喬木。野レイシとも言い、レイシに似ているが味はレイシほどよくない。チベット、雲南、広西の1600m～3000mの傾斜地に存在する〔植物百科電子版：2020〕。

た「おまえは将来花は咲かないが、実を結ぶことはできる」。ウシャは黄栗の林に行き尋ねた。黄栗の木は答えた「見てないです」。ウシャは、怒って言った「人が世に出るのを待って、おまえを切って鋤の柄にする」。ウシャは松林に行き尋ねた。松の木は答えた「見てないです」。ウシャは怒って言った「人が世に出るのを待って、おまえを切って松明にする」。ウシャは葦の茂みに行き尋ねた。葦は答えた「見てないです」。ウシャは怒って言った「人が世に出るのを待って、おまえを刈って編んで壁にする」。ウシャは荊竹の林に行き尋ねた。荊竹は答えた「見ました」。ウシャは喜んで言った「人が世に出るのを待って、おまえで口琴⁽¹⁵⁾を作ろう」。ウシャは河辺に行き蜂に尋ねた。蜂は答えた「見ましたが、私の体は小さいので持ってないです」。ウシャは喜んで言った「将来おまえの生活は豊かにしてやろう」。

ウシャは海辺まで行き、葫芦が海に浮いているのを見つけ、魚に取りに行かされた。魚は渾身の力を使っても岸に上げることができなかつた。ウシャはアカシカに取りに行かされた。アカシカは角を曲げて、やすにしても岸に上げることができなかつた。ウシャはカニに取りに行かされた。カニは二つの大きなはさみで葫芦を挟んで岸に上げた。ウシャは喜んでカニに言った「おまえを一生瓦屋根の家に住まわせてやろう」。だからカニの背中に硬い甲羅が育つようになった。

ウシャは葫芦を持ち帰り物干し台の上に置いた。干すこと77日、葫芦の中で口笛を吹く声がある。さらに12日が過ぎ、人が葫芦の中で話をしている「誰が我々を出してくれるのだろう、出してくれたら我々が植えた穀物を食べさせよう」。スズメは聴こえたので、勇気を奮い起こし葫芦を啄んだ。永い間啄んで、長いくちばしで啄み尽くすかそれとも葫芦を啄んで貫通しないかだ。ネズミが咬みに来て、3日3晩咬んで、ついに一つの穴が開き一人の男と一人の女が葫芦の中から笑いながら出てきた。ウシャは喜んで二人に名前を付けた。男は扎迪(ザディ)、女は娜迪(ナディ)。(ウシャは功績を称えた)⁽¹⁶⁾。

(15) 响篋。楽器の一種。竹を薄く割り造る。口に啞えて吹き手で弾く。多くの少数民族の青年男女がこれを用いて気持ちを伝える。「口弦」と言う民族もある〔姚2014：169〕。

(16) 別の版本では、「ザディとナディが、スズメに山で新米を食べてもいいし、ネズミは穀物倉庫で新米を食べてもいいことにしたので、スズメとネズミはとても満足した」。と言う文が書かれている〔思茅地区民族事務委員会編1990：6〕。

三、ザディとナディの結婚、人類の繁栄



雲南省瀾滄景の宿泊所中庭にある、ザディとナディの彫塑像

〔2009年12月 筆者撮影〕

ウシャの庇護の元で、ザディは元気に育ち、ナディは美しく上品に育った。ザディとナディは大人になった。ウシャはふるいを箕の中に置き彼ら二人に見せた。さらに一組の石臼を作って合わせ、彼ら二人に見せた。彼ら二人が結婚しなければならないことを暗示した。しかし、ザディとナディは気にならなかったため、ウシャはやむなくザディ、ナディに思ったままに言った「お前たち二人は結婚して子供を育てなければならない」。ザディ、ナディは答えた「私たちは一つの所から来たし、兄と妹でもある、夫婦にはなれない」。話が終わり、ザディはきまりが悪くて阿基山へ逃げて行き、

ナディもきまりが悪くて阿沃山に逃げて行った。ウシャはある方法を考えて、それは心が平静を失う薬⁽¹⁷⁾を蜜蜂の体につけて阿基山の周りをぐるぐる回らせ、さらに阿沃山の周りをぐるぐる回らせるのだ。ザディとナディは薬のことを聞き一緒にもとの場所に戻ってきたが、夫婦になることは承諾しなかった。ウシャはさかりのつく水をザディとナディに飲ませた。ザディとナディはどんな水か知らないので、ザディは大きな葫芦二つ分、ナディも大きな葫芦二つ分を飲んだ。おいしいと思ったので、また大きな葫芦三つ分をこっそり飲んだ。ザディとナディは夫婦になった⁽¹⁸⁾。

ザディとナディは夫婦になって仲睦まじく一時も離れない。彼ら二人は竹の茂みに来た時、タカにみられた。タカは言った「おや、おまえたちここでいいことしてるな、ウシャに言いに行かないといけな」。ザディとナディは「頼むからウシャには言わないで欲しい、子供ができるまで待つて欲しい。そうすれば、育てたひな鶏をおまえにあげよう」と言った。タカは承知して飛び去った。彼ら二人は林の中に来たが、こんどはトラに見られた。トラは言った「仲がいいな！お前たちはここでいいことをすればいい。私はウシャに言いに行く」。ザディとナディは「頼むからウシャに言わないで欲しい、子供ができるまで待つてくれたら、育てた小ブタをおまえにあげよう」。冬が過ぎ春が来て、ナディの顔色は血色がよく、体も重くなり、全身けだるくて、食べたくないし、飲みたくない、酸っぱい物が食べたいだけだった。彼女は山に行き酸苔菜⁽¹⁹⁾をたくさん食べたが、相変わらず体力がなかったので、岩の洞穴からたくさんの蜜蜂の巣を取り出し食べたが、まだ体力がなかった。ウシャはナディの顔と身体を見た後に言った「お前は身ごもっているんじゃないか？」ナディは答えた「酸っぱいものと甘いものしか食べたくないが、身ごもっていない」。半年余りが過ぎ、お腹の子は大きくなり、ナディは子供を産まなければならない。ナディは体をビワの木にもたせかけ気を養った、ビワの木も実を結んだ。

(17) 迷药〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：94〕。

(18) 別の版本では、「ザディとナディは、酒の中に心を惑わす薬が入っていることを知らなかったので、ナディは小さな椀に二杯、ザディは大きな椀に三杯飲み、酔ってしまった。ナディはおいしいと思い、また大きな椀に三杯こっそり飲んだのでナディも酔ってしまった」。〔思茅地区民族事務委員会編1990：7〕。

(19) 雲南省東南部のシーサンパンナ、広西、スリランカ、シンガポール等の400～1500mの密林に分布する灌木。タイ族常用の野菜〔植物百科電子版：2020〕。

ナディは両手でオリーブの木に寄りかかり気を養った、オリーブの木も実を結んだ。最後に、ナディはアイ⁽²⁰⁾の茂みに行き子供はアイの茂みの中で産んだ。血がアイの葉、アイの根を赤く染めた。ナディが産んだ子供は人間に似ていない⁽²¹⁾。季節を過ごし13の節気が過ぎた。

ウシャは指折り数え、子供が生まれる日がきたので、ウシャはナディに訊ねた「子供は生まれたか？ナディは答えなかった。ウシャはクロスズメバチに探しに行かせるほかなかった。クロスズメバチは多くの山々が合わさる処、多くの河が合わさる処⁽²²⁾に飛んで行き、アイの林にいる子供を見つけたが、クロスズメバチは怖くて掴めず、ウシャに本当のことを言わなかった。ウシャは怒って、金の棍棒で打ってクロスズメバチの体を二つにしてしまったが、死なないので、ウシャは可哀想に思い、糸を使い切れた体を繋ぎ合わせたので、クロスズメバチの体は腰が細い棒のようになってしまった。ウシャは、カササギ⁽²³⁾にも探しに行かせた。カササギは多くの山々が合わさる処、多くの河が合わさる処まで飛び、戻って来たが本当のことを言わなかったので、ウシャは怒り、罰としてカササギを低いところの巣穴にいさせないで、高い木の枝にだけ巣を作らせるようにするほかなかった。ウシャはこんどはミツバチに探しに行かせた、ミツバチは多くの山や河が合わさる処まで飛び、子供がアイの林の中にいるのを見つけ、戻ってきてウシャに言った。ウシャは喜んで言った「お前の将来は豊かな生活で、食べきれない蜜があるようにしよう。人がお前を動かそうとしたら、髪を切り河に流してしまえ」。

13年で13組の男女の子供ができた。ウシャは虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、狗、豚、鼠、牛12の動物に、それぞれ一組づつを育てさせた。ウシャはさらに言った「お前達を育てた動物の名前を取ってお前たちに名前をつけよう」。虎が育てた男の子は扎拉（ザラ）と名付け、女の子は娜

(20) 藍。靛林。ラフ族が布を染めるために用いる染料で、鮮やかな藍色に染まる〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：94〕。

(21) 第一代目の人類の結婚は兄妹婚であったから、奇形児が生まれた。

(22) ラフ族の移動の伝説に出てくる地名で、現在の金沙江（雲南省北部の怒江・瀾滄江と並び流れる大河）一帯〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：95〕。

(23) 喜鵲。スズメ目カラス科。全長45cm。頭・胸・背から尾・足にかけては黒。腹が白。アフリカ、ヨーロッパ、東アジアにかけて広く分布する〔ブリタニカ国際大百科事典電子版：2015〕。

拉（ナラ）、兔が育てた男の子は扎妥（ザト）、女の子は娜妥（ナト）、龍が育てた男の子は扎保（ザルオ）、女の子は娜保（ナルオ）、蛇が育てた男の子は扎斯（ザス）、女の子は娜斯（ナス）、馬が育てた男の子は扎母（ザム）、女の子は娜母（ナム）、羊が育てた男の子は扎约（ザユエ）、女の子は娜约（ナユエ）、猿が育てた男の子は扎莫（ザモ）、女の子は娜莫（ナモ）、鶏が育てた男の子は扎阿（ザア）、女の子は娜阿（ナア）、狗が育てた男の子は扎丕（ザピ）、女の子は娜丕（ナピ）、豚が育てた男の子は扎袜（ザワ）、女の子は娜袜（ナワ）、鼠が育てた男の子は扎发（ザファ）、女の子は娜发（ナファ）、牛が育てた男の子は扎努（ザヌ）、女の子は娜努（ナヌ）、最後の一組はザディとナディが自分達で育てた男の子は扎哩（ザリ）、女の子は娜哩（ナリ）。これより後はラフ族は生まれた年の干支から名前をつけることになった。

四、火の発見⁽²⁴⁾

地上に人類があるようになったが、まだ火は無く、鳥や獣を毛が付いたまま血の滴るままで食べる生活をしていた。ウシャは、手と足の泥を擦り落として一丁の火縄銃を造り、一塊の白い雲と黒い雲を放った。ウシャはまた二吹き風の風を起こした、一吹きは白い雲、一吹きは黒い雲。二吹き風の風は両側から向かい合って吹き、白い雲と黒い雲がお互いにぶつかり合い雷を起こし、火花が山の斜面まで飛んで、様々な動物にぶつかったので、ムササビは飛ばされた。その時代、ムササビに翼はなく、人には翼があつて、人はムササビの火が欲しいと思ひ、ムササビは人の翼が欲しいと思つた。ムササビは人を探すができず、人もムササビを探せなかつた。その後、トガリネズミ⁽²⁵⁾が仲を取り持ち言つた「ムササビに翼があれば木の上まで飛んで果実を食べることが出来る。人に火種があれば生活がうまいく」。それでこのように、ムササビは人の翼を得て飛び去つた。人はムササビの火種を得て山頂に持って行き、4本の火を放つた。1本は東の

(24) 別の版本では、“取火”火種を取るという題になっている〔思茅地区民族事務委員会編 1990：9、本書編集委員会編 1995：690〕。

(25) 食虫目トガリネズミ科トガリネズミ属。体長は2～5cm。普通のネズミに似ているが、口が長く突き出している。ユーラシア大陸、北アメリカ、中央アメリカに分布する〔ブリタニカ国際大百科事典電子版：2015〕。

山に、1本は西の山に、1本は南の山に、1本は北の山に放った。火は段々大きく燃えて草を焼き尽くし、樹木を焼いて枯れさせたので、鳥は休む場所がなく、獣は逃げ隠れるところがない。

ウシャはまた火縄銃を取り出し、一塊の白い雲と黒い雲を出した。白い雲と黒い雲はまたぶつかり、大雨を降らせて山の火をすべて消す必要があった。火花は急いで身を隠す石を探さなければならなかった。煙は火種を起こす草⁽²⁶⁾を探し、身を隠そうと助けを求めた。石と草はぶつかり火花を出した。火種は保たれた。

五、狩猟、民族が分かれる

あらゆる鳥が鳴きながら空を飛び交い、あらゆる獣が吠えながら地上を歩く。彼らは人間の肉を食べたいと思っていたので、人々は限りなく恐れた。ウシャは獣の心を見抜き、人間を食べてしまわないかと心配し、あらゆる鳥とあらゆる獣を呼び寄せ彼らに言った「人間の肉を食べようと思うのは良くない。大小の鳥たちは紐で結び目を造る。クマ・ヒョウ・トラ・ヤギウは深い穴を掘り、キョン・アカシカ・ヤギは角で物を挟む道具を造り、大小の魚たちは大きな網を編む。鳥や獣は何日も忙しく動き、より多くより良く完成させねばならなかった。ウシャは彼らを待たせて人を連れてきた。鳥や獣は永い間待っていたので、あるものは居眠りをし始めたその時、人々は石や木の棒を持ち、四方から来て大声で怒鳴り彼らを威嚇したので四方へ逃げて行行った。鳥は紐の結び目で押さえつけられた。クマ・ヒョウ・トラ・ヤギウは深い穴にはまった。魚は網にもぐり込み、キョン・アカシカの角は挟まれて動けず、自分で自分を痛めつけた。ほかは驚いて飛んで逃げた。これ以後、鳥や獣も敢えて人に出会おうとしない。

13組の人は、それぞれが多くの人生んだ。多くの人は山の尾根に住み、多くの人は竹林に住んだ。草を食べ尽くし、穴が出来るほど土を食べた。彼らは約束して狩りに行き、多くの投げ縄、多くの竹槍、多くの石弓、多くの石の刀を造った。彼らは多くのアカ犬・クロ犬を連れてたくさんのキョン・アカシカそれに無数の鳥を得た。彼らは一匹の大きなトラを何日も追

(26) 火草。扎獸草。雲南の多くの民族は、石を打ちつけて火を取るのので、火に近づけるものが必要になる。この草を乾燥させてから使うと簡単に燃やせる〔姚2014：167〕。

いかけた。ある日、突然大雨が降ってきて、多くの人が大樹の下⁽²⁷⁾で雨宿りし、ラフ族と成った。多くの人が芭蕉の下⁽²⁸⁾で雨宿りし、漢族と成った。多くの人が花の咲く木の下⁽²⁹⁾で雨宿りし、ハニ族と成った。雨が止んだので、彼らはまたトラを追いかけ、母トラを尾根の狭い道に追い込んだ。多くの竹槍を一齐に投げ、多くの矢を放ち、多くの投げ縄を一齐に投げ、多くの刀で一齐に叩き切った。トラの骨は4つに切断し、肉は四つに分け、火を起こして焼いて分けて食べた。それぞれの食べ方で。

ある人々は言った“肉をよい香りがするまで焼いて食べる”、これらの人々はラフ族となった。ある人々は言った“肉をよく炙り、おいしい時に食べる”、これらの人々はハニ族となった。ある人々は言った“肉を炙り、きつね色に焦げたら食べる”、この人々はタイ族となった。ある人々は言った“肉を遠火ですこし炙り食べる”、これらの人々はワ族と呼ばれた”。ある人々は言った“水を沸かして茹でてすぐに食べる”、これらの人々は漢族となった。

民族が分かれたので、ウシャはアヒル・アカシカ・カササギ・シジュウカラを分配した。アヒルは、タイ族を引き連れて盆地に住んだ。アカシカはラフ族を引き連れて山奥に住んだ。カササギはハニ族を引き連れて山の中腹に住んだ。シジュウカラはワ族を引き連れて山の頂に住んだ。漢族はどこにでも住めた。各族は分かれて住み、みんなは楽しく日々を過ごした。

六、家を建てる

鳥は巣があり、鼠は穴がある、人も家が必要だ。ザリとナリは栗の林に行き柱を伐った。一日に4本伐り、5日で20本伐り倒した。ザリとナリはまた別の林に行き、5本の木を伐り梁を作った。彼らは4つの山を越え、4本の花ビワの木をたたき割り梁を繋いだ。4本を3本の梁に繋ぎ、20本の柱を切り4列にした。ザリは盆地の端に来て竹を伐り、たくさん積み上げ

(27) 木の皮は一枚なのでその下で雨宿りしたラフ族は、衣服が少ない〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：97〕。

(28) 芭蕉の下で雨宿りした漢族は、芭蕉の樹皮が何層もあるように衣服を多く持っている〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：97〕。

(29) 花の咲く木の下で雨宿りしたハニ族は花が好きで、いつも頭に花をつけている〔雲南拉祜族民間文学集成編集委員会1988：97〕。

た。ナリは山に行き茅を刈り、たくさん積み上げた。葦で4枚の壁を編んだ、2枚は長く、2枚は幅広くした。龍竹で床板を作り、尾根の狭い道にある茨竹で垂木を作った。黄竹を一一列並べ、多くの茅を竹の上に敷いた。ごく小さな床に4つの角があり、出入り口は太陽に向けて開いている。新しい家は良くできて、ザリとナリは心から喜んだ。みんなはザリとナリの家の作り方を学び、多くの山と多くの峠に家を作った。ラフ族の家は同じで、人々は住み、うきうきしている。

七、農具を造る

クロスズメバチが黄栗の木に来て蜜を吸っている。人々は蜂の巣を掘らねばならない。一枝の白い良い香りの花、ラフ族が美しい花と呼ぶ花を髪の毛を用いてクロスズメバチの腰に結びつけ、大きな1匹のバツタを捕まえる。クロスズメバチは大きなバツタを持ち上げ、勦⁽³⁰⁾博盆地の端を飛び越え、白吉山へ向けて飛び、緑の林を通り抜け、霧谷盆地の奥の山里まで飛び、秘密の谷まで飛んで巣へ入った。蜂の巣の中を探してみると、全部一塊の焼けたクロスズメバチだった。数ヶ月燃え続け、洞穴の中に一筋の血が滴った。クロスズメバチは焼け死んで、洞穴の中の火は消え、滴るのは血ではなく鉄だった。みんなは手で握ったので血が出た。掻き出そうにも動かない。1匹のアカシカが走って来て、人を見てびっくりして頭を木の切り株にぶつけ、角を折った。アカシカの角は尖っていて硬いので、みんなは持って来て鉄鉱石を掘った。鉄鉱石を掘って高く積み上げ、伐り倒した栗の木を焼いて炭を作った。蟻が掘った穴で、数ヶ月ずっと焼き続け、鉄鉱石は溶鉄になり滴り落ちて、牛の糞のように積みあがった。鍛冶屋の張力八を探してきて、キョンの皮を剥いでふいごを作り、キョンの蹄で火ばさみを作り、足の骨で大きな金槌を作り、頭の骨で金敷を作り、白い花の咲く木の実のように最初の鎌を打ち出した。牛の糞にわく虫のように最初の犁を打ち出した。鎌で草を刈り、犁で耕す。この時から、ラフ人の生産は良くなった。

(30) 雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州の旧行政単位。タイ族の言葉で“小さな平地”の意〔中日大辞典第3版電子版2010〕。

八、穀物を植え、季節を分ける

ザリとナリはウシャの話の通りに、龍のように山坂をぐるぐる回り水田と畑を分けた。茅を刈り火をつけて穀物の上に撒き畑を作った。水田をどうやって作るか知らなかったので、ウシャは彼らに教えた。水牛の角に刻まれた通りにする。畦は曖昧にできないので、ザリとナリはツバメに助けに来てもらい、ケラに田を耕してもらった。田はちゃんと起こされ、畑は耕されたが、植える種がないので心配した。

ウシャはカッコウに4粒の穀物の種を持って来させた。2粒は田の穀物、2粒は畑の穀物。ザリとナリは種が少ないのを厭がったが、ウシャは彼ら二人に言った「4粒の種は四方に植える、一粒は米、一粒はもち粟、一粒は粟、一粒は畑作の穀物だ。春に一粒播いて、立秋のあとは、いくつもの大きなかごに収穫だ」。

ザリとナリは喜んで、白い花の咲く時期に穀物の種を播いた。田の前方に米、田の後の方にもち粟を播き、畑作の穀物や米は斜面に播いた。穀物の種を播いて36日が過ぎ、ウシャは一雨降らせた。3月になり穀物は芽を出し、4月穀物の苗は艶々した緑になり、まさに草かきの季節だ。5月穀物は良く茂り、イナゴが飛んできてつばみを突く。7月穀物は実りはじめ、8月穀物は黄色に澄み渡る。穀物が黄色になるとラフ族は狂喜する。9月10月は収穫に忙しい、女は刈り取り、男は穂を打つ。11月米を搗き12月になる。今年はずっと来年の食糧の準備ができた。12月が過ぎ正月が来た。正月はラフ族の新年。1年360日、一番いい暮らしは今日だろう。部落の入り口には桃の花が咲き、部落の端にスモモの花が白い。芦笙を吹きながら踊り、楽しく過ごすラフの新年⁽³¹⁾。

(31) 別の版本では、「男たちは芦笙を吹きながら踊り、女たちは手を繋いで円になり銅鑼の伴奏でぐるぐる回り円になって踊る。疲労と災難を送り、来年の豊作を迎える」〔思茅地区民族事務委員会編1990：13〕〔本書編集委員改編1995：694〕。

参考文献

日本語

- 飯倉昭平編集 (1983) 「雲南少数民族の創世神話」『雲南の民族文化』7～50 研文出版
- 伊藤清司、星野紘 (1987) 「現代の生活に伝わる創世神話」『すばる10月号』190～196
- 君島久子編 (1989) 「二度の人類起源」「混沌からの誕生」『東アジアの創世神話』28～78 弘文堂
- 田畑久夫他 (2001) 「ラフ族」『中国少数民族事典』149～150, 237 東京堂出版
- チャレ著・片岡樹編訳 (2008) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所叢書『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』雄山閣
- 劉敬栄・張琪著、陸芸娜・山本恭子訳 (2010) 「無形文化遺産の観点から見たラフ族創世史詩「ムパミパ」」『中国雲南少数民族の無形文化遺産の世界』金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第8章、金沢大学人間社会研究域
- 片岡樹 (2016) 「文化の資源化と宗教—中国ラフ族の「葫蘆文化」論をめぐる」『民俗文化資源とポリティクス 中国南部地域の分析から』235～270 風響社

中国語

- 雲南省編集組 (1981) 『拉祜族社会歴史調査(二)』雲南人民出版社
- 拉祜族民間文学集成編集委員会・孫劍冰編集 (1988) 『拉祜族民間文学集成』中国民間文学出版社
- 周谷城主編 (1989) 中国文化史叢書『中国創世神話』上海人民出版社
- 中国各民族宗教与神話大詞典編審委員会編 (1990) 「拉祜族部分」『中国各民族宗教与神話大詞典』372～376 学苑出版社
- 雷波、劉輝豪 (1995) 『拉祜族文学簡史』雲南民族出版社
- 瀾滄県地方志編纂委員会編 (1996) 『瀾滄県志』雲南人民出版社
- 雲南省地方志編纂委員会総編 (1998) 「第9章 拉祜族語言文字」『雲南省志卷59 少数民族語言文字志』282～283、638 雲南人民出版社
- 王正華、和少英 (1999) 『拉祜族文化史』雲南民族出版社
- 羅承松 (2001) 「思茅少数民族的葫芦神話及其文化内容」34～36 思茅師範高等専科学校学報第17卷第2期
- 李定凱編校 (2002) 「伏羲考」『聞一多學術散文抄・神話研究』105～108 巴蜀書社出版

- 中国民間故事集成全国編集委員会（2003）『中国民間文学集成雲南卷上冊』中国 ISBN 中心出版
- 楊洪（2006）「拉祜族的哲学思想」『思茅民族文化研究』116～122 雲南大学出版社
- 張勁夫、温美珍（2008）「拉祜族神靈信仰与占卜習俗初探」8～14 思茅師範高等専科学校学報第24卷第4期
- 鄧瑾（2008）「試析拉祜族原始宗教与神話的基本特徵」10～13 思茅師範高等専科学校学報第24卷第5期
- 瀾滄拉祜族自治県民族宗教事務局・石春雲編（2009）『从葫芦里出来的民族—拉祜族』雲南民族出版社
- 楊春（2011）『中国拉祜族』213～224 寧夏人民出版社
- 楊雲燕（2012）「拉祜族創世史詩《牡帕密帕》的思惟構造解讀」57～60 楚雄師範学院学報第27卷第7期
- 馬健雄（2013）『再造的祖先：西南辺疆の族群動員与拉祜族の歴史建構』香港中文大学
- 姚宝瑄主編（2014）『中国各民族神話·白族 拉祜族 景颇族』山西出版伝媒集团·書海出版社
- 陳丹（2015）「探求西南古老的神話王国—李子賢活形態神話研究述評」30～34 文山学院学報第28卷第4期
- 劉露（2016）「国内拉祜族研究総述」1～8 普洱学院学報第32卷第1期
- 熊開万（2019）「《牡帕密帕》の叙事主題与拉祜族文化的創新性發展」90～96 昆明学院学報第41卷第1期